

情報化時代における東アジアの相互理解のための価値意識・情報倫理の比較社会論的研究

著者	仲田 誠
発行年	2018
URL	http://hdl.handle.net/2241/00158864

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26380668

研究課題名(和文) 情報化時代における東アジアの相互理解のための価値意識・情報倫理の比較社会論的研究

研究課題名(英文) A comparative study on value consciousness and information ethics for mutual understanding of East Asia in the information age

研究代表者

仲田 誠 (NAKADA, Makoto)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：50172341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の研究代表者は、プライバシー問題への関心、公共性の意識などが日本的な「世間・運命観意識(図式)」に強く規定されているという日本の情報社会の実態を実証的・文献的に明らかにし、独、米、英などの研究者の強い関心を引き起こしてきた。その後の予備的調査で「世間・運命観」的な価値観は中国、タイなどでも共有されていることが明らかになった。この研究では、日本と東アジアの国・地域を対象に、上記の問題をロボット倫理や公私観などの論点についての問題も含めてさらに詳しく分析した。今回の研究では、東アジアでは「世間・運命観意識」が一種の鳥瞰図的・観照的視点としての働きを演じていることが調査によって明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this project, we tried to analyze 'cultural meanings and values' associated with some of the important IIE (intercultural information ethics) topics in 'Far East,' i.e. 'human and robot interaction(HRI)' and 'privacy.' While focusing on these relatively newly emerging topics in 'Far East,' we examined the roles of Japanese Seken-related views or Japanese Ba-related views in detail. What we found is: In Japan, Seken-related views or Ba-related views make a kind of form of bird-eyes views which hold various meanings and views in the information era as a set of views on life within it; A similar tendency (presence of bird-eyes views or a combination of views of observation and reflection) can be found in China and South Korea too; On the other hand, people's views on the distinction between public and private are different among Japan and East Asian countries.

研究分野：情報倫理 ロボット倫理 情報社会論

キーワード：情報倫理 存在論 ロボット倫理 東アジアの価値観 比較情報倫理 日本 伝統的価値観 情報社会 技術と

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、平成14年以降、「情報社会の比較文化論的研究」、「情報倫理の比較文化論的研究」に関する量的質的研究を主として欧米の研究者(Capurro, Essら)と共同で続けてきたが、この研究を通じて以下のようなさまざまな興味深い知見(一部仮説的図式も含む)を得ることができた。1) 伝統的な日本の価値観・人生観の(再)発見。この価値観・人生観は「物質文明・現代文明批判主義」(的世界観)といったものと「間人主義・共生的人間関係指向」と呼びうるものの組み合わせでできている。(間人主義というのは濱口恵俊による造語。)具体的には、前者は、「運命観的見方」、「物欲否定」、「現代文明批判」、「利己主義批判」といった一連の価値観によって構成される。後者は、「家族や友人などとの親密な人間関係」を生きがいとして指向し、「誠実であること」を重要視する「互助的・間人主義的な人間観」である。本研究の代表者である仲田はこうした価値観・ものの見方を「世間・運命観」(図式)といった名称(これは暫定的なもの「世間」という語は誤解を招きやすいが、ある時期から特に外国の研究者に対しわかりやすい図式を提供するために英語の論文では *Seken* あるいは *Seken-related views* という用語を使用している)で呼んでいるが、これはもともと本研究代表者(仲田)が1981年以来日本で実施してきた「災害観調査」を通じてその実態があきらかになってきたものである。仲田が単独あるいは共同で(東大助手廣井脩=当時=らとの共同研究)実施した災害観調査の中でその存在が明らかになり、また環境問題に関する意識調査(三上俊治らと共同の研究)の研究を通じても繰り返し確認されてきた価値観・ものの見方に関わるものである。客観的で合理的な因果関係の図式(中村雄二郎がいう「主語の論理」)では「災害は天譴論である(災害が発生するのは天の人間に対する警告である)」という考えや「人間には運命がある」などという考えは説明できず、日本人の心の底に残った古い非近代的な「神話的思考」の残滓であるとしか説明できないが、こうした価値観・ものの見方が存在することは過去の一連の調査によって継続的に確認されており、否定しようがない事実である。Capurro(2006)は情報倫理の研究は存在と存在者、形而上学と存在論を取り違えてきたという批判をするが、これは参考にすべき考えであるように思える。(Capurro, Rafael (2006). *Towards An Ontological Foundation of Information Ethics, Ethics and Information Technology*, vol.8, Nr. 4, 2006, 175-186.)また、中村雄二郎は西田幾多郎の説を踏まえて「主語の論理」に対し「述語の論理」を提唱し、また木村敏も「もの」に対し「こと」的世界観を提唱するが、仲田の考えでは「世間・運命観」(図式)はこうした考えと結びつけて論じることができるように

思える。2)このような伝統的価値意識(「世間・運命論(図式)」)あるいは「存在論的意識・図式」とさまざまな社会問題、「インターネット観」、「プライバシー観」、「公私意識の問題」、「政治意識」、「環境問題への関心」、「地域活性化への関心」、「原子力エネルギー、食の安全性などに関わるリスク認識・リスク観」、情報倫理に関する意識、公共的意識情報環境における諸問題への意識・関心との間に「連関」が見られること。これは、伝統的な価値意識が長く日本人の心の中に存続し、それが現代の社会問題をとらえる原点にもなっているということを示す結果であり、「生活世界 *Lebenswelt*」(フッサール、シュッツ)という言葉を使えば、「世間・運命論(図式)」は日本的な生活世界のありかたと深く重なっているということも言える。また、ある種の「もののあわれの見方」あるいは「伝統的な存在論と美的意識が交叉するところに生じる意識」や「災害や事故の犠牲者に対する共感意識」も「ロボット観」や「プライバシー観」と「連関」することが日本の調査では一部明らかになっている。3)「日本的価値意識」が「東アジア的価値意識」であることの発見。さらに、その後、本研究の研究代表者は、継続して中国やタイなどで一般社会人、学生の意識調査を行なってきたが(平成19年以降)、この研究を通じて、これらの地域・国の人々も、日本人ときわめて似た「世間・運命論(図式)」(あるいは、「精神主義・間人主義」人間観・世界観)をもっていることが明らかになってきた。4)東アジア的価値意識とインターネット観、情報倫理に関する意識、公共的意識との関連性の発見。こうした意識がたぶん儒教、道教、仏教経由のものであることを考えると、東アジアでの価値観の類似性はさして「驚くべきこと」ではないかもしれない。しかし、注目すべき点は、中国やタイにおいても、インターネット観、プライバシー観は、日本と同様、「世間・運命観(図式)」と強い関連性(統計的な)を有することが調査によって明らかになったことである。5)本研究の代表者(仲田)らの研究で見えてきたことの一つは、いわば「境界領域」での体験・意識(「両義的体験・意識」)の意味の重要性に関わるものであるかもしれないという考え、仮説の浮上。ある意味では、日本の歴史や文化は、異なる分野の活動に基づいた異なる意味が存在してきてきた、そのような場所、時間空間との関連性で捉えられる意味をもったものであった(ある)のかもしれない。日本の文化を中国と韓国の文化と比較し、特に「無」または「無私」、「去私」という概念が日本の文化を特徴付けていることを、日置弘浩一郎(1993)は述べている。(日置弘一郎 1993「東アジアの組織行動」濱口恵俊編『日本型モデルとは何か』新曜社、385-399頁。)日置によれば、日本人は(潜在的に)複数の文化的および社会的文脈が意味をも

つ環境、すなわち文化的文脈の多元主義的環境に生きている。日置によれば、複数の文化的文脈の存在が、文化と社会の近代化に必要な前提の一つであるとされるのである。一見、「無私」や「去私」は、文化と社会の近代化とは関係がなさそうだが、これもいわば文化的文脈の多様性に関わるものなのである。網野善彦の無縁に関する議論(1996)でも、日常と非日常の転換や交叉だけでなく、ある種の権威や視点の交換、生と負の意味の交叉にも関わる問題が提起されている。5) 仲田がかつて述べたように(2000) (「アメリカ的災害・日本の災害-災害観・災害論の比較文化論的研究」)、一見、自然現象のように見える災害現象の「素因」(大雨や地震、異常な高さの潮流など)もそれが人間の生活のありかたや人間関係のありかた、意識と交叉するところで「素因」としての意味を持つようにも思える。プライバシーやロボットに関してもこのようなモノとヒトの交叉の領域が大きな意味をもつのではないかという仮説も生じてくるのである。

2. 研究の目的

以上のような研究開始当初の背景、過去の研究成果を下敷きにして、4年間(当初の予定の3年間の研究を1年間延長した)の研究の研究計画が設定された。具体的には、日本、中国、韓国の3か国を中心にほぼ同一の内容で調査が実施され分析された。その内容は、「研究の背景」で述べた5つの点の確認、検討に関わるものであり、その確認の内容、分析の結果から引き出される論点を検討するのが本研究の中心的な目的となった。こうした点の分析は過去の研究(本研究のもとになった過去の研究・調査)の継続という側面ももつが、今回の研究では、日本だけでなく、中国や韓国でも調査を実施すること、台湾でも一部予備的な調査を実施すること、先に述べたいわば境界領域での体験・意識(「両義的体験・意識」)の意味の重要性の確認に関わる質問も織り込んだことなどが過去の研究ではなかった点である。

3. 研究の方法

調査計画、実施に関しては、過去の「世間・運命観」と情報社会における価値観・ものの見方との間の連関に関する研究と同様の手法を踏襲した。過去の関連研究のデータを再度詳しく分析し、新たな視点からの分析の可能性も模索し、その結果に関して内外の研究者と討論を行い、またアジアからの留学生とも対話しながら、研究計画、調査実施方法、内容を吟味した。

この期間に実施した主要な調査は以下のとおりである。

2014HG 調査：本研究代表者らが2011年に実施した2011HGと同じ手法、同じ対象(福島、宮城、岩手被災3県の25~44歳男女729人)に対して2014年に実施(2011HG調査

は、2010年に政府が実施したインターネット利用者調査に基づき、割り当て法で実施=年代、性別ごとに調査対象者数を事前に割り当てた)。2014TWS 調査：2014年7月に台湾政治大学181名の学生を対象におこなった調査。2015CG：2015年9月に中国で北京、上海、広州在住25~44歳男女300人を対象に実施。2016KG 調査：2016年9月6日5月23日~5月31日の期間に韓国・ソウル・釜山両市在住のインターネット利用者男女300名(30~39歳)を対象に実施。2016HG 調査：2016年12月に、2014HG調査と同じ手法、同じ対象(福島、宮城、岩手被災3県の25~44歳男女600人)に対して実施。

これら一意の調査の詳しい内容、得られた知見については以下の文献を参照されたい。Nakada, Makoto (2009a). Ethical and critical views on studies on robots and roboethics. *Submitted paper to Joint-workshop on Ethics and Robotics by ReGIS, Cybernics and STI-IE* (October 3, 2009, University of Tsukuba.) Nakada, Makoto (2009b). Blogs and privacy in *Seiken* as a Japanese life-world including indigenous moral norms. *A paper submitted to CEPE09(Computer Ethics: Philosophical Enquiry) in Corfu, Greece(3 days conference from 27 June to 29 June 2009)*, pp.1-17.

4. 研究成果

本研究で得られた成果のうち、主要な点は以下ようになる。

(1)「世間・運命観」的価値観・ものの見方の中国、韓国、日本、台湾などの各国・地域での存在の確認。

「災害は天が懲らしめのためにおこす」、つまり、天譴論に関する日本で最初の実証的調査は「大船渡調査」(岩手県大船渡市およびその周辺地区在住の20~69歳の男女名を対象に、1981年9月に面接法でおこなった調査。回収数は628票)であったが、この調査からは、以下のような事実が得られた。「災害発生時の生死は運命によってきまっている」という意見に「非常に賛成」と答えた回答者は35.0%という高い数字で、「どちらかといえば賛成」まであわせると、64.9%という数字になる。さらに天譴論への共感もかなりの数字になった。その後の首都圏住民などを対象にした仲田らの調査で「運命論」や「天譴論」への高い共感度は繰り返し確認された。このような調査結果は、日本人の意識の中にある種の存在論的意識が継続的に存在することを意味しているように思われる。「存在論」という表現は曖昧ではあるが、それについては、ある種の「両義的領域」が存在することに関わるものの見方というような説明を与えれば、ある程度理解が進めようと思える。

網野らの議論は紹介したが、他にも同様の考えを示す研究は存在する。日本の人類学者である山口昌男は、日本の能楽は悲劇的な記憶、反逆者の存在、死や亡霊など、日常世界

では容認されない存在や出来事の意味、「他者」の存在・出現が重要な意味をもつ演劇空間であると語った(山口、1983)。安田登は、能楽の舞台では、言葉と言葉、言葉と言葉の発信者、それを聞く者の意識の融合、想像の世界、現実の世界、生と死の世界の融合が生じる場であるという(安田、2014)。さらにそこでは、古い閉じた社会の拘束や束縛から解放された視点の交流がそこでは生まれる。このような考えは文学的な想像に傾斜した考えのようにも思えるが、木村敏のいう「こと」とはまさにこのような未分化な意識や意味の出現をわれわれが経験する場である(木村敏、2000、『偶然性の精神病理』、岩波)。また、「述語の領域」での経験や論理のありかたをこうした問題と結びつけることもできるかもしれないという仮説も生まれる。以上は、本研究代表者の解釈や仮説も含むが、これがたんなる憶測でないことは以下に示す調査データの数字が示すとおりである(表1)。

この表1にみるように、東アジアでは「世間・運命観」(あるいはそれに類似した考え)が予想以上のひろがりを見せているのである。

表1 「世間・運命観」への共感(東アジア)

	2011 HG 日本	2014 HG 日本	2015 CG 中国	2016 KG 韓国	2014 TWS 台湾
自然	78.0 %	71.2	82.0	86.0	91.1
清貧	87.0	80.4	76.3	67.3	85.1
運命	82.4	77.5	76.3	80.4	81.8
科学	88.2	81.8	89.3	91.0	97.8
自己 中心	80.3	76.8	91.6	91.0	86.7
無力	77.8	72.7	-	-	61.9
うわ べ	72.7	70.0	77.6	83.0	58.0
誠実	74.3	66.5	78.0	79.7	77.9
天の 警告	60.2	59.0	80.0	75.3	64.1

1) 上の表1の数字は、「共感できる(このような意見や考えに)」と「ある程度共感できる」の合計値。2) ここでの「世間・運命観」の具体的内容は以下のとおり。「現代生活の中で人間はあまりにも自然からはなれ過ぎてしまっている」(自然)。「人間は豊かになりすぎると墮落しがちなものだ」(清貧)。「人間には何らかのかたちで運命というものがある」(運命)。「世の中には科学で説明できないことも数多くある」(科学)。「今の日本(中国、韓

国・・・)には自己中心的な人間が多すぎる」(自己中心)。「今の世の中では一人一人の人間はあまりにも無力である」(無力)。「今の世の中が明るく楽しそうに見えるのは表面的な部分だけである」(うわべ)。「人のためにつくせばいつかは自分にプラスとなってかえってくるものだ」(誠実)。「最近災害が多いのは人間に対する天からのある種の警告である」(天の警告)。

(2)「世間・運命観」と「ロボット倫理」等との連関。

「世間・運命観」(表は「世間・運命観」の項目の一部だけ示してある)は表2のように、日本の場合、「ロボット倫理」の各項目とほとんどの項目で有意な相関をもつ。論理的には「自然からの遊離」や「清貧の思想」は「ロボット倫理」の問題とは関係なさそうだが、表に見るようにここにははっきりとした「連関」がある。欧米のロボット倫理の議論では「(ロボットの)自律性」や「責任」という論点から問題が論じられることが多いが、日本の場合、議論の枠組みが違っているように思える。一方、「個人主義」も一部「ロボット倫理」と関連している。中国の場合(表3)、日本と同様、「世間・運命観」も「ロボット倫理」と関連するが、一方、「個人主義」や「私的利益の優先意識」も「ロボット倫理」と関連している。韓国の場合(表は省略した)、「世間・運命観」は「ロボット倫理」とほとんど関連せず、「個人主義」や「私的利益優先意識」が「ロボット倫理」との間でかなり強い関連性を示している。

表2 「自然からの遊離」・「個人主義」と「ロボット倫理」の相関(2014HG 日本)

	自然か ら の遊離	清貧	個人 主義
介護	.309**	.311**	-.015
ロボット 兵士	.275**	.312**	.014
汎生命論	.297**	.297**	.082*
ロボット への同情	.276**	.254**	.142**
針供養	.248**	.231**	.170**
ベット口 ポット	.158**	.188**	.140**
教育用 ロボット	.084*	.131**	.256**
鉄腕アト	.242**	.270**	.150**

ム			
---	--	--	--

1) **相関係数は 1% 水準で有意 (両側)、 *相関係数は 5% 水準で有意 (両側)、 **や*がない数字は有意な相関関係なし(以下の表でも同様)。
 2) ここでの「ロボット観 (ロボット倫理)」の具体的内容は以下のとおり。「自動化されたロボットに老人の介護をまかせることは便利ようだが、同時に、機械に世話される老人はちょっとかわいそうな気がする」(介護)。「自動化されたロボット兵士を使って戦争で相手の人間を殺傷する計画があることを聞くと、なにかやりきれなさを感じる」(ロボット兵士)。「生命をもたない地球、大地、山や川であってもそれを慈しむのは人間的な感情として当然のことだ」(汎生命論)。「生命をもたないロボットでも、作った人の心がこもっていることを考えると、むやみに壊したりすることには抵抗感がある」(ロボットへの同情)。「針供養という儀式があるように、使われなくなったロボットやコンピュータはもっと供養されてもいい」(針供養)。「ペットロボットなどの心を癒すロボットに共感するのは、アニメの登場人物に共感するのと同じで自然なことだ」(ペットロボット)。「学習効果をあげるために、ロボットを学校で子供の教育用に使うのは、良いことだ」(教育用ロボット)。「鉄腕アトム最後のエピソードが地球を救うためのアトムの自己犠牲だったと知ると感動する」(鉄腕アトム)。
 3) 個人主義 = 「他人の意見に頼らず自分一人の判断でことを決めた方がうまくいく」。

表 3 「自然からの遊離」・「個人主義」と「ロボット倫理」の相関 (2015CG 中国)

	自然からの遊離	清貧	個人主義	(会社備品の) 私的利用肯定
介護批判	.319**	.125*	.013	.010
仮想生命体共感	.199**	.058	-.015	.085
ロボットの権利	.039	.168**	.223**	.263**
汎生命論	.050	.116*	.189**	.156**
子供の世話	.103	.099	.124*	.197**

1) 「自律意思や意識がない昏睡患者や胎児に権利

があるように、ロボットにも将来権利が与えられるべきだ」(ロボットの権利)。「ロボットに子供の世話をさせるのは、子供を一人で放置しておくより良いことだ」(子供の世話)。
 3) 私的利用肯定 = 「あまり会社や同僚に迷惑がかからないなら、職場の備品 (ノートや筆記用具など) を自宅に持ち帰って私的に使うのは、それほど悪い行為ではない」。

(3) 「世間・運命観」と「プライバシー観」等との連関。

表 4 に見るように、韓国の場合、「ロボット倫理」の場合とは違って、「プライバシー観」は、「世間・運命観」と強い関連性を有している。この点から見ると、「世間・運命観」が情報社会におけるさまざまな問題に関するものの見方や考えを深層から規定する包括的図式であるという説明が韓国でも成り立ちそうである。これは、中国や日本でも同様である (表は省略した)。

表 4 「世間・運命観因子」と「プライバシー因子」の相関 (2016KG 韓国)

	プライバシー - 尊重	プライバシー - より集団 や個人の近 さ
世間運命 1 (現代文明批判)	.510**	.132*
世間運命 2 (他者指向)	.312**	.379**
世間運命 3 (天譴・運命)	.139*	.251**

1) この表の数値は、「プライバシー」に関する項目を因子分析の手法にかけると 2 因子を得るので、この因子と「世間・運命観因子」(これは表 1 の項目を因子分析した結果得られる因子)との相関係数を計算したものの。

(4) まとめ

このように、日本においては、「世間・運命観」が情報社会におけるさまざまな問題に関するものの見方や考えを深層から規定する包括的図式である」という説明図式の妥当性はかなり確実な説得力をもって確認されたと考えて良いであろう。中国、韓国でもこの説明はあてはまる部分も多いが、一方、中国、韓国では「情実指向」や「個人主義」も「世間・運命観」と同じようなかたちで「ロボット倫理」、「プライバシー観」と連動するものの見方・価値観であるという知見も得られた。この点、興味深い新たな知見が得ら

れたと言える。「無」や「無縁」、「両義的意味の領域」等に関する点、そうした領域、意味を含んだ文化的な複合性の問題については、潜在的には東アジアにもそのようなものが存在するといってもよいのかもしれない。ただ、それを中国や韓国の人たちがどう自覚しているかは別問題であり、今回の調査ではその点は検討課題として残った。調査データでは、「無」、「無縁」や「両義的意味の世界」にもつながると思われる「世間・運命観」への共感が東アジア全体で高かったのは表の数値が示すとおりである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

Nakada, Makoto(2017). Roboethics in the 'Far East' (East Asia) countries seen from their cultural perspectives or Ba (*Se-ken*). Nakada, M., Capurro, R. and Sato, K. (eds), *Critical Review of Information Ethics and Roboethics in East and West*, vol.1, pp. 69-80, 2017-03. (By Master's and Doctoral Program in International and Advanced Japanese Studies(Research Group for 'Ethics and Technology in the Information Era'), with help of Friedrich Ebert Foundation of the German Federal Republic). 単著、査読有り。

Nakada, Makoto (2015). Japanese cultural and ethical Ba (locus) as the place of new sources for technological and social innovation as well as for ethical discussions on robots and life in the information era. *ACM SIGCAS Computers and Society - Special Issue on Ethicomp*,45(3),pp. 240-247, 2015-09. 単著、査読有り。

Nakada, Makoto(2014). Robots in Japanese cultural Ba as reflecting the phenomena of Ichinyo (oneness) and Mu (nothingness). *CEPE(Computer Ethics: Philosophical Enquiry) Conferences 2014 proceedings* (paper 11)/2014,pp.1-12, 2014-06. 単著、査読有り。

[学会発表](計 7 件)

仲田誠、2017、「情報化時代の東アジアにおける価値観・人生観」、2017年日本社会情報学会(SSII)学会大会、セッション-2「情報行動(1)」駒沢大学1-203(1号館2階)2017年9月16日。

Nakada, Makoto, Values over Things :The Potential of Neo-Communitarian Networks in Asia (in English), Tsukuba Global Science Week 2017: Beyond Globalization, Part Two Neo-Communitarian Society 5.0, Tsukuba International Congress Center Convention Hall 200, Sep 25 (Mon)2017.

[図書](計 1 件)

佐藤貢悦、斎藤智文、嚴錫仁、2014、『日中韓マナー・慣習基本事典』、勉誠出版、全256頁。

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

仲田 誠 (NAKADA, Makoto)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：50172341

(2)研究分担者

佐藤 貢悦 (SATO, Koetsu)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：80187187

海後 宗男 (KAIGO, Muneo)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：60281317

石井 健一 (ISHII, Kenichi)
筑波大学・システム情報系・准教授
研究者番号：90193250